薬師と牛頭天王

山田知子

無病息災、延命長寿は、いつの時代にも変ることのない人間の本性的な願いであろう。その為に古来さまざまな養生法が講じられてきた。科学わけても医学の知識や技術に依存して養生しようとすることの多い現代にあっても、古来よりの習慣として正月には一年の健康と無事を願って寺社に参詣し、厄年には厄除けに霊験あらたかと聞かれる神仏に祈願がなされている。まして医・薬に関する知識や技術の未発達な時代にあっては、人智人力を超えた神仏の偉大な力に依存することが大きかったと思われる。古来民間に信仰されて来た神仏はさまざまであるが、薬師に対する信仰もその一つであろう。ここでは、庶民の薬師信仰をとりあげることにより、我が国古来の養生思想の一端を明らかにしていく手がかりを得たいと思う。

一般に我が国における薬師信仰は、仏教伝来とともにはじまったといわれている。『薬師琉璃光如来本願功徳経』には、「仏告二曼殊室利一東方去レ此過二十殑伽沙等佛土一有二世界一名二浄琉璃佛号一二薬師琉璃光如来応正等覚明行圓満善逝世間解無上丈夫調御士天人師佛薄伽梵一曼殊室利彼佛世尊薬師琉璃光如来。本行二菩薩道一時発二十二大願一令二諸有情所レ求皆得一」と説かれている。金岡秀友氏は『薬師経講話』にこの十二大願のうち第六の諸根完具と第七の除病安楽が、「薬師経」の中心であるといわれ（『大法論』44―7）花山勝友氏は、『薬師如来とは何か』において薬師の十二大願は、本来は衆生を得悟させるための手段であったが、いつしかそれが目的であったかに解せられるようになり、我が国においては、治病除災に利益ある仏として迎えられたと述べられている、（『大法輪』44―7）又村山修一氏は、『日本の薬師信仰』で「薬師信仰は歴史的にも最も古く、上下の階層を問わず普遍的なものである。」しかも「独立の宗派的教団が生起せず、教団的布教をこえた民族的な習俗の中でひろまっていった。」（『大法輪』44―7）といわれている。

そこでまず、各地の薬師信仰を調べてみると次のようで、必ずしも「薬師経」にもとづいて祀られたものばかりではないことがわかる。

㈠山（峯）の薬師　山の上や中腹の寺や堂に祀られており、山中の木・岩石・池・滝等に出現されたという伝承をもち、山岳修行者によって祀られ、天下国家の人々に代って罪穢れを減ぼす苦行をし、治病・除災・豊穣等を祈願する悔過修行の対象仏とされて来たものである。例えば、三河鳳来寺の峯の薬師は縁起によれば、白鳳年中利修仙人が峯の霊木で彫造されたと伝え、修正会の薬師悔過が行なわれて来た。大正時代まであった鏡堂には多数の鏡が奉納されており、罪穢れを鏡に写し（移し）病気平癒が祈願されたものとみられている。又、三河額田町桜井寺の薬師堂には病気平癒を願って奉納されたと思われる髪の毛や穴あき石が残されている。

㈡水薬師　湧水又は湧湯より出現されたという伝承をもち、その水又は湯を浴びるか服すれば、病気が治癒すると信じられてい

る。例えば、岡崎市真福寺の薬師は、山上の池から出現されたと伝えられ水躰薬師と称せられている。ここでは薬師堂に百日あるいは一年間籠り、毎日境内外を掃除し仏前に花や水を供えることによって不治の病が癒えたという霊験談が幾例も伝えられている。

㈢海中出現の薬師　常陸の大洗磯前、酒烈磯前両神社の祭神は、『文徳天皇実録』（斎衡三年十二月二十九日及び天安元年十月十五日）に夜中光るものが海上に見え二ケの怪石が天降って、ある人に大己貴・少彦名命であるという託宣があって、後に「薬師菩薩名神」として祀られたと記されている。少彦名命は『日本書紀』（上八段一書）に「為二顕見蒼生及畜産一則定二其禁厭之法一」又為レ壊二鳥獣昆蟲之災異一則定二其療レ病之方一」とあり、『古事記』には「自二波穂乗二天之羅摩船一（中略）有二帰来神一」と記されている神である。病を治し、災いを除き、幸せをもたらす神すなわち薬師は、海の彼方に行った神であり、民びとの苦難を救いに帰って来ると信じられていたと思われる。出雲の一畑山薬師は、この海から上られた薬師を山の上に祀り、祈願者は毎日海藻を海に拾いに行き仏前に供えたという。

㈣航海安全の薬師　板の底は地獄といわれる舟で航行する人々に信仰され、薬師堂の前を通過する時は、必ず帆を下げるか上陸して参詣するかしなければ海が荒れると信じられ、帆下げ薬師とか波立薬師等と称されている。又、例えば豊橋市前芝町蛤珠寺の薬師のように、海が荒れても一心に念ずれば難をまぬがれるとも信じられている。

㈤亡霊済度の薬師　亡霊の祟りを鎮めることによって疫病の発生、洪水、日照り等の災害を防ぐために祀られたと思われるもので、例えば、名古屋市西区の琵琶島橋東岸にある清音寺の薬師は、『尾張名所図会』に尾張に流罪となった藤原師長が京に帰る時、恋人であった娘が悲しみのあまりこの地で自殺したのでその霊を鎮めるために祀られたと伝え蚊祭薬師と称されている。おそらく川祭で、洪水による被害が亡霊の祟りと信じられたのであろう。

㈥妻（夫）薬師・子授け薬師　良縁、夫婦円満、子授け等に霊験ありと信ぜられ、盆踊り歌等の歌詞にそのことがうたわれているのが特徴である。例えば、磐城市閼伽井岳常福寺には、八月三十日の夜、北茨城一帯から参詣し一晩中盆踊りで夜を明し、疲れると本堂の床下で雑魚寝をし、この夜ばかりは男女の交際も自由であったと伝えられる。すなわち盆の亡霊供養や鎮魂の芸能のおこなわれた場所に祀られていた薬師が縁結びやひいては子授けに霊験ありと信仰せられるようになったと考えられる。

㈦災難除けの薬師　火難・水難・盗難・雷・蝮除け等に霊験ありと信仰されて来た薬師もあり、かつて山伏や祈禱師らが、これらの災難除けの呪術等をおこないその効験が伝えられて来たものと思われる。

諸病のなかでも最も恐れられたのは疫病であろう。各地には疫病の時に祀られたと伝えられる薬師が多い。その代表的なものは祇園社（八坂神社）と津島牛頭天王社にみることが出来る。牛頭天王（現素戔嗚尊）を祀る祇園社の神殿の側には明治の神仏分離まで薬師堂があり、本地仏として薬師が祀られ、感神院とも観慶寺とも称されていた。『祇園牛頭天王縁起』によれば、牛頭天王は須弥山豊饒国の王武答天王の子で、南海の龍王の娘婆利采女の許に赴く途中、巨端将来は宿を貸すことを断わったが、蘇民将来は貧しい家の中に厚くもてなした。後に巨端将来一門は疫病で皆殺

しにされたが蘇民将来の子孫たるものはすべて守られるとあり、『二十二社注式』の祇園社の項には、「牛頭天王初垂二跡於播磨明石浦一移二広峯一其後移二北白河東光寺一其後（中略）天慶年中移二感神院一」とある。『備後風土記』（逸文）の疫隅社縁起では、牛頭天王の子武塔神の話となり、北海より現われて「吾者速須佐雄神也」と名告っている。素戔嗚尊といえば『古事記』に「青山如二枯山一泣枯河海悉泣乾是以悪神之音如二狭蠅一皆満万物之妖悉発」とある荒ぶる神で「負二千位置戸一亦切レ鬚及手足爪令レ抜」て根の国に追い払われるが、『日本書紀』（上八段一書）には「降二到於新羅国一居二曾尼茂梨之処一及興言曰、此地吾不レ欲居遂以二埴土一作レ舟、乗之東渡到二出雲国簸川上所在鳥上之峯」とある。柴田実氏は『祇園御霊会』（『御霊信仰』）の中で、「牛頭天王が、わが国の素戔嗚尊と同一視されるというのも、普通にいわゆる本地垂述の思想に基づくよりも、さらに端的に両者がともにやらわれる神であったことからくる観念連合であった」と解されているが、追い払らわれねばならない恐ろしい神であると同時に、よく祀られることによって恩寵をもたらす神でもある。又この神が、海の彼方の国から来たということも共通している。

一方津島牛頭天王社は『尾張名所図会』に「素戔嗚尊の和魂韓郷の島（新羅国）より帰朝ましまし先づ西海対島に留まり、その後欽明天皇元己年この神島に光臨し給う。」とあり素戔嗚尊が疫病を鎮める恩寵神となって海の彼方の国より帰って来たと伝え、その本地仏として明治維新まで薬師が祀られ神宮寺と称せられていた。ここの祭礼にはいまも「神葭流し」の秘密神事があり、神主がすべての人々に代わって人形に息を吹きかけて穢れを写し、川に流すという。この神葭は、もとは伊勢湾へと流れゆき、これが流れついたところではただちに着岸祭を丁寧に行って祠を立てて祀らなければならなかったといわれ、三河では着岸祭に必ず笹踊りを行ったと伝える。太鼓を打ちながら踊躍する笹踊りによって神葭の祟りを鎮め、疫病の発生を防ごうとしたものと思われる。

薬師が、牛頭天王あるいは素戔嗚尊の本地仏として祀られ信仰されたのは、病気のなかでも最も恐ろしい悪疫の流行をもって祟りを表わし懲罰を与える反面、荒ぶる疫神を鎮め疫病に苦しむ人々を救う恩寵を与える神と同じ性格をもつと信じられていた故であると思われ、恐しい神・仏であればあるほど、偉大な力を持つという観念のあったことがうかがわれる。髪を切り、幾日もかかって石に穴をあけて奉納し、あるいは参籠して奉仕活動をする等は、我が身と社会の無病息災、延命長寿を薬師に願った人々の誠心誠意の表われであると思われ、ここに我が国古来の養生思想の一端をみることが出来る。